

## 特集 交流拠点としてのホテル



特集…交流拠点としてのホテル

立教大学観光学部





## 立教大学観光学部に 「交流文化学科」誕生。

国や地域間を問わず、観光による移動は人々の意識を変え、文化を包容させていきます。

2006年4月に新設された「交流文化学科」は、近年観光の役割として注目されている「交流」に焦点を合わせ、地域研究とともに、多文化共生への視点を養い、グローバル化する世界で交流の実をあげうる国際公務員、ジャーナリストなど国際的な人材の育成を目指します。

特集

### 02 交流拠点としての ホテル

### 04 ホテル——交流を生む旅の結節点 毛谷村英治（観光学部）

### 12 ホテルから見る国際関係 舛谷 鋭（観光学部）

### 16 ホテル空間に「交流文化」を読む ジェフリー・バワ 多文化化する身体 稲垣 勉（観光学部）

### 24 「交流文化」フィールドノート④ 「富士屋ホテル」見学 大橋研究室

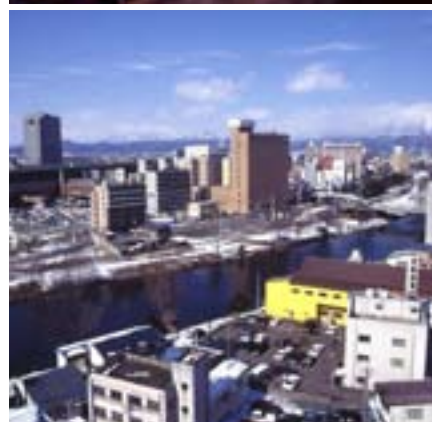
### 36 ゲートウェイシティ盛岡の誕生とホテル 松村公明（観光学部）

### 40 読書案内 『ホテルと日本近代』 『日本ホテル館物語』

### 42 最近の講演会から ディズニーランドと 中国のテーマパーク開発 保継剛（中山大学教授）

### 44 学部国際交流の現場から 02 サウジアラビア、クウェート、オマーン 中東三か国を訪問して 小沢健市（観光学部）

スルタン・カブース大学（オマーン）代表団来日



立教大学観光学部  
〒352-8558  
埼玉県新座市北野1-2-26  
TEL 048-471-7375

学部の紹介や入学案内については

<http://www.rikkyo.ne.jp/grp/tourism/>





特集

# 交流拠点としてのホテル

ホテルは旅行者が宿泊するためだけの場所ではない。そこは、様々な人々が出会い、交錯するコミュニケーションメディアでもある。本号では、まず近代日本のホテル史を概観しながら、時代によるホテル建設の目的と利用者の変遷をふまえ、「交流機能」を分析する。また国家レベルの交流の場としてのホテルの役割に着目すると共に、ひとりの建築家を通して、ホテルを設計する人物の文化的背景とホテル空間の関係を見る。さらには、都市地理学の視点から地域や人の流れをホテルを通してつかむ方法を紹介する。



# ホテル——交流を生む旅の結節点

毛谷村英治（観光学部）

ホテルは宿泊のためだけでなく、様々なコミュニケーションの場として、誰がどんな目的のためにどう利用するかを想定したうえで建てられる。近代日本のホテル史を概観しながら、その交流機能に焦点を絞り、ホテルの意味を考察する。

写真協力／清水建設、帝国ホテル、日光金谷ホテル、ホテルニューオータニ

日本で初めてのホテルとされる「築地ホテル館」（1868年）



# Hotel

# ホ

テルはその土地の人ではない遠来の訪問者を宿泊させるために設けられるものであったが、社会的な状況やその地域がおかれている特有の事情によってホテルの建設を発意する主体は異なり、利用者像も違ってくる。

日本の場合、外国からの要人を宿泊させることを目的に開国を間近に控えた江戸幕府が築地ホテル館の建設を命じたことに端を発することから、遠来の客をもてなし、宿泊させる目的でホテルを作るということが当たり前のようになっていく。だが、植民地を経験した国々では、宗主国の資本でホテルが建設され宗主国から訪れた客が宿泊するというかたちで発展してきており、日本のホテルが置かれてきた状況とは異なっている。

## ライト設計の帝国ホテル

日本においては、西洋人が自国でのライフスタイルを保ちつつ日常生活ができるように建設されたホテルであったが、ホテルが立地する日本の伝統や個性を排除する必要は決してなかった。遠来の客にとっては、慣れ親しんだ出身地のライフスタイルを旅先でも維持できることは喜ばしいことであるが、遠く離

れた異国の地を訪れ、現地のローカルなライフスタイルに触れてみたいという気持ちを誰も持たないとは言いが切れない。

現に近年のリゾートホテルでは、インターナショナルなスタイルにローカルな地域的特色をアレンジしたホテルが好まれている。もちろん、開国したばかりでローカルな要素のうち何が好まれるのか分からない状況では、日本固有の地域性を西洋式ホテルの中にアレンジすることなく欧米のホテルをそのまま真似て建設するだけで精一杯であったと思われる。したがって、ホテルに慣れ親しんだ西洋人建築家に設計を依頼したりするケースが登場したのである（F・L・ライト設計の帝国ホテル等）。

途上国を植民地として支配した宗主国の場合、植民地の文化そのものを蔑視する傾向が強くなり、彼らにとっては野蛮にさえ見えたと現地での生活を味わいたいと願う西欧人は少なく、宗主国の生活スタイルをそのまま実現できる宿泊施設としてホテルが建設された。そのため、ホテルの利用者は宗主国をはじめとした先進国からの旅行者で占められ、滞在者同士の交流が行われることはあっても、現地の人々と宗主国からの旅行者が交流するという図式は皆無に近い状態であった。

## 南満州鉄道によるヤマトホテル

旧満州（現中国東北部）において南満州鉄道が駅ホテルとして各地に建設したヤマトホテルは、鉄道旅行者の便宜を図ることを目的にはしていた。だが、実際には中国を挟んでロシアやヨーロッパ諸国と対峙する日本がその国威と技術力を顕示するために建設を進めた。日本の傀儡政権が統治していた満州国においては、満州国国民に日本の先進性を示すだけでなく、ロシアをはじめとした欧米列強に対しての示威行為の一環として先進的な都市計画と近代的な生活関連施設を建設して示す必要があり、日本国内よりも先進的な試みを満州において実現した。日本国内に向けてのプロパガンダとしては、日本と同様の発展を遂げる満州の姿を示すことができれば十分であったが、国威を顕示すべき相手は国外に存在したのである。ヤマトホテルでは、南満州鉄道を利用して訪れる外国人だけでなく、主に日本人を中心とした現地満州国の特権階層の人々が訪れ利用する姿が数多く見られた。しかし、ここは個人レベルでの交流よりも国レベルでの関係性における対外的体裁と面子を重視して建設されたホテルなのであった。

日本初のグラランドホテルである帝国ホテルも、欧米列強諸国に対して技術的にも生活様式の面でも日本が引けを取らないことを示すために日本政府の資金を投じて建設された。

伝統的な旅館に対する評価が高まっている現状から考えると、この考え方は欧米文化に媚びた思想に基づく発想だったと言えなくもないが、まだ日本の伝統文化が国際的にどれほど評価されるか分からなかった状況下では致しかたない。帝国ホテルにおいては外国要人と日本の政治家や官僚あるいは華族や富裕層などの特権階級の人々が交流した。一般の

人々の利用はまだほとんどなかったもので、第二次世界大戦終結までのしばらくの間は帝国ホテルをはじめとする少数のホテルのみで日本のホテル需要は賄うことができたのである。

## 東京オリンピック以降のシティホテル

東京オリンピックを契機として国際的にみて見劣りしないシティホテルが数多く建設されることになり、日本においてもホテルが急激に増加することになる。このタイプのホテルは、オリンピックを観戦に訪れる外国人客を見込み、その後も外国人旅行者の需要が伸

びると期待して建設されたものであったが、実際には外国人客の需要は期待されたほどには伸びなかった。その後、一部国内富裕層の商用旅行需要に支えられたが、洋式ライフスタイルがまだ十分に一般の人々の間に普及しておらず、国内のホテル需要が爆発的に拡大することはなかった。

この状況を鑑み、一般のビジネスマンの商用旅行を対象とした比較的安全で宿泊が可能な、宴会場など付帯設備を持たないビジネスホテルが登場する。このビジネスホテルの出現によりホテル需要が急速に拡大し、一般の人々の観光旅行にもホテル



帝国ホテル・ライト館（1923年）



大連ヤマトホテル（1909年・現大連賓館）



創業当時のホテルニューオータニ（1964年）

が利用されるようになってきた。ホテルでの宿泊を通して地域と交流し地域文化を学ぶというのではなく、ホテルの客室そのものから洋式ライフスタイルを学んだのである。言うなれば、ホテルに宿泊すること自体が未知の洋式ライフスタイルを体験するというブチ観光だったのである。

近年の海外ブランドホテ





昭和初期の日光金谷ホテル



ヘレン・ケラーの名前が記された宿帳（日光金谷ホテル）（1937年7月5日）



日光金谷ホテルには多くの外国の著名人が宿泊した。リンドバーク夫妻との記念撮影

ルの建設ラッシュは、それらを望む海外からの旅行者の存在が背景にあるとされているが、実際にはそれらの客は従来のグランドホテルやシティホテルの滞在に大きなストレスを感じていたわけではなく、かえって日本的なものを提供してきたそれらのホテルに魅力を感じていたかも知れない。彼らにとっては日本に来て欧米と違うぬ生活ができるホテルがあることは便利であるに違いないが、そこに地域性が感じられなければ日本のホテルとして魅力的であるとは言えない。景気回復のための政策的な起爆剤として都心の建物の容積制限が緩和されたことや、金太郎館と揶揄されるワンパターン化した再開発形態

資系企業の外国人駐在員たちが期せずして利用したことで需要が満たされている。注目を浴びるホテルが続々と建設されることによつて、旅行を続けるための手段としてホテルに宿をとっていた本来の姿としてのホテル需要が変容しつつあり、ホテルに滞在することを観光の第一目的に旅行を行う例が出てきている。

**ホテルにおける交流の中心**

次に、ホテルにおける交流がどのように行われるか、具体的な中身を見ていこう。ホテルは旅をする人のための宿泊施設であることから、そこには旅人が持ち込む多種多

様な情報が集まり、旅人同士あるいは旅人とホテルスタッフとの間でそれらが交わされる。個々の旅人は自分に必要な情報を取捨選択して次の目的地へと出発して行く。得られた情報が直接役立つこともあれば、得られた情報を他の場所で披露することが誘い水となつて、さらに当人にとって有益な情報を得ることができたりする。ホテルには様々な旅人の出身地や彼らが通つて来た通過地からの情報が集まるため、面的な広がりを持った地域の様々な情報が集まる。

出身地に関する情報に関しては、そこでの日常生活の経験からありとあらゆる種類の情報が得られる可能性があるが、通過地点に関する情報は旅行者の視点から眺めて得たものであり限定的なものでしかない。しかしながら、旅行者の旅の途中で求める情報は個別性がそれほど強くはなく類似したものであり、限定された少ない情報であっても旅行者の満足感を概ね得ることができるといえる。これは、旅行者が限られた場所しか訪れておらず、活動そのものが限定されているからであり、日本を訪れる外国人旅行者の行動に着目してみればこのことがよく分かる。

古くから営業している伝統的な日本のホテ

ルの宿帳には世界的な著名人の宿泊を示す記録が残されている。例えば、日光金谷ホテルには物理学者アルベルト・アインシュタインやヘレン・ケラーの名前を見つけることができる。外国人が日本を訪れる時に訪問する場所は、よほど日本最顶层で日本に精通している人を除けば、概ね限られた都市や観光地ではなく、日光などは外国人にとっては観光地としてポピュラーなところであった。その日光を外国人が訪れると滞在する宿泊施設として日光金谷ホテルは定番の宿であり、そこに著名外国人の名前が残っていたとしても不思議なことではない。観光とは、こうして限られた場所をピンポイントで訪れ、わずかばかりの時間を過ごす行為であるとも言える。

一般の人々にとっては、こうした著名人が訪れた宿を訪れると、そのこと自体を話題とすることができる。そのことを旅の土産話とすることができる。日頃接触することがない著名人、あるいは、遠い過去に活躍した人々が訪れた足跡をトレースすることで会ったことのない著名人に対する親しみが深まる。憧れの人々が使った同じ空間を体験することで少しでも同じ気持ちを感じてみたいという意識が満たされるのであろう。いわば時空を超え

た一種のバーチャルコミュニケーションが存在しており、それが伝統あるホテルの魅力の一つとなっている。

### 文化の伝達の場として

ホテルにおいては、都市についての情報交換を行うだけでなく、文化の伝達も行われている。地域の名物料理を食べて料理方法を学んだり、他の都市で流行しているファッションを旅行者から学び影響を受けるといった交流がある。もちろん、新たに人と知り合ったり、親交を深める人的交流も行われる。社交ダンスのためのボールルームなどは、かつてそこで社交ダンスが行われたことの証であるが、社交ダンスは男女のペアが行うダンスで、言うなれば今日のお見合いパーティー、すなわち合コンであった。男女の出会いを演出する舞台としてボールルームがあったわけであるが、それは英国各地のホテルで今も残っている。ここで、日常生活においては出会うことのない遠方の異性と出会い、結ばれることが多々あった。直接的かつ具体的な人的コミュニケーションの姿である。

もちろん、地域のコミュニケーションを維持するための、言うなれば公民館としての使

われ方をしているホテルもある。周辺の住人たちがティータイムに集まり、世間話をして互いの関係を築いて行く。また、政財界の人々が朝食会を催して親睦を深めたり、地域のライオンズクラブなどのコミュニティあるいはソサエティの本拠地としてホテルが利用される親睦が図られている。こうして、ホテル本来の顧客である宿泊客ではないホテルの周辺の地域住民同士が互いに親睦を図る場としてホテルを利用している。

結婚式場や結婚披露宴会場としての利用の仕方もこの延長線上にあるが、これは日本のホテルの独自の発展形態の中で成立したものであり世界的に見ると非常に珍しい。結婚披露宴のために作られたホテルチェーンも存在しており、宿泊機能よりも宴会機能に力を注いだ空間構成となっている。ホテルの持つ非日常のハレの場としての特殊性と宗教的な色に染まらぬプライベートな社交空間としての特性が日本人の婚礼祭典の需要にフィットし、結婚式や披露宴の会場としてホテルの利用が促進された。ここでもホテルの持つブランド性が大きく影響している。

ビジネスあるいは政治上の会議の場、学術的な学会集会の開催場所として利用されるこ

ともある。ホテルのロビーは公的に開かれた待ち合わせ空間として利用され、そのままそこで商談が行われることがよくある。部屋を借りて会議や商談、親睦や情報交換のための朝食会やランチ・オン・ミーティング、式典や商品発表会を行うなど様々な形での利用がなされている。国交のない国同士の政治的協議や多国間で行われるサミットなどの国際会

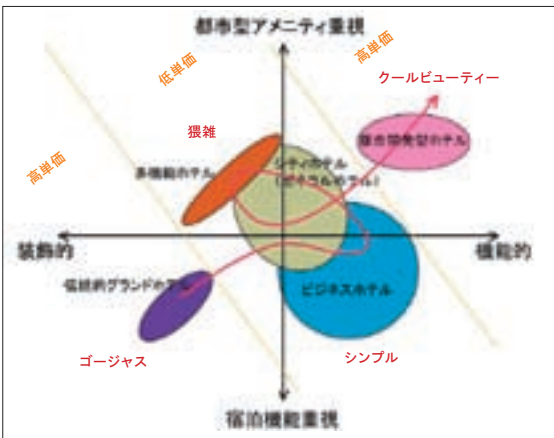
議の場として利用されることもあり、期間限定の多様な空間ニーズに対応してきた。定期的に各地を巡回するかたちで開催される学会大会やシンポジウムなどもホテルを利用して行われることがある。都市によっては国際会議場やコンベンションセンターなど大型の会議イベントに対応できる施設を持つところもあるが、小口・単発で行われる会議の場合にはホテルが利用されることが多い。

### 個人・組織・国レベルでの交流

このように、ホテルは個人から組織、そして国レベルでの交流が様々な形で行われているのである。ホテルによっては目指す交流のレベルが異なり、なかには宿泊客であるなしを問わずに街の人々が集まって来て楽しめる場所、すなわち都市のプラザとなることを目指したホテルも出現している（京王プラザホテル等）。宿泊客以外の客が入り込むことで静寂が損なわれ喧嘩が増す可能性があるために当初は懐疑的に受け取られていたが、宿泊客と買物客の通る道筋すなわち動線を適度に分けることで魅力的でヨリ行感のあるハレの舞台としての都市型施設が各地に出現してきている。ここでは、新たな出会いによる交流を

第一義に望むのではなく、同行している仲間と同じ環境を体験することによって親睦を深めたり、居合わせた他人に対してドレスアップした自分を見せることにより、いわば舞台の主人公を演じるという自己満足を得ることができる。ホテルが都市生活者の自己表現のための舞台としてハレの場になっているのである。

旅人の宿泊施設として登場したホテルは旅に関する情報の入手方法が限られていた時代は、旅人たちが自ら盛んに情報交換を行い旅人同士の交流が行われる場所であった。異国進出の拠点としてのホテルの役割が高まってくると外交の場すなわち国対国のコミュニケーションの場としての意味合いを帯びてくる。その後、ホテルは地元民相互のコミュニケーションの場として利用されるようになり、人々の間に一般化し普及する。しかしながら、非日常のハレの場としての役割は少なからず残っており、祝事など生活の節目にハレの舞台として利用されるが、人々の一般的な生活水準が向上してきたに伴ってハレの場としてのホテルに求める水準も自ずと高まっており、ここに近年の外資系ブランドホテルの進出という現象が理解できよう。



■日本におけるホテルの機能特性からみた変容





# ホテルから見える 国際関係

舛谷 鋭 (観光学部)

ホテルは国家レベルの交流の場としても重要な役割を果たしている。各国で進む官民一体となったホテル建設の背景には国際舞台における自国の存在のアピールという意味が込められている。

写真協力/万国津梁館、済州新羅ホテル

## ホ

テルという場合は、私たちが個人レベルでさまざまな交流の拠点として利用するのみならず、一国の

威信がかけられた国際関係の檣舞台として、国家レベルでの交流においても重要な役割を果たしている。各国の代表的なホテルの成り立ちやロビーに掲げられたVIPの写真などからは、国際政治や国際関係の動きが見えてくる。

EUモデルが一応の成功を取めて以降、

アジアでも様々な地域協力の試みが行われてきた。たとえば、ASEAN(東南アジア諸国連合)は当初反共連合として出発したが、今では社会主義国であるベトナムやラオスを加え、「ASEAN10」として地域の安定と国際社会での地位向上を図っている。APCC(アジア太平洋経済協力)のように経済協力で特化した会合や、世界華商大会のように特定のエスニシティによる国際会議もある。

### 国際会議の場として

こうした地域協力は、首脳会議や実務者会合など定期的な国際会議を伴うのが常だ。開催地となるホスト国にとって、会議の成功や多くの国賓をもてなすことはもちろん、国際的に自国に関心を集めるチャンスでもある。各国首脳、大臣や随行人、マスコミなど、膨大な人員を受け入れる一大イベントの舞台となるのは、たいていの場合ホテルである。

2000年G8サミットの会場となった万国津梁館と、首脳陣の宿泊ホテルとなった「ザ・プセナテラス」(沖縄・名護)





エンパイアホテル（ブルネイ）

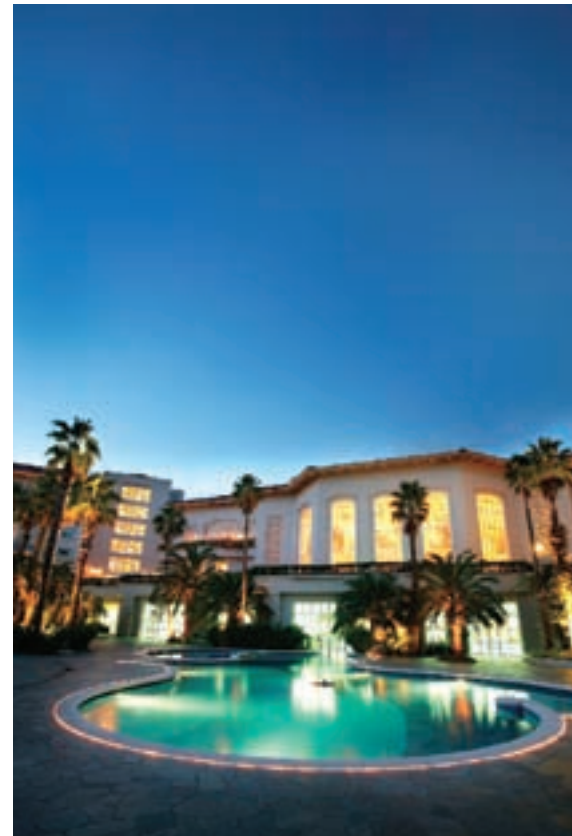
## アジア各国の主な国際会議と開催施設

国際会議	開催年	都市（国）	関連施設名	開業年
APEC	1998	クアラルンプール（マレーシア）	パンパンフィックホテル	1985
G8サミット	2000	名護（日本）	万国津梁館	2000
APEC	2000	バンドルスリブガワン（ブルネイ）	エンパイアホテル	2000
APEC	2003	バンコク（タイ）	ペニンシュラホテル	1998
APEC	2005	釜山（韓国）	ヌリマルAPECハウス	2005
APEC	2006	ハノイ（ベトナム）	メリアホテル	1999

MICE (meetings, incentives, conventions and exhibitions) ツーリズムを掲げ、会議、展示会を積極的に誘致しているケースも少なくない。アジア域内で、シンガポールとともにMICEツーリズムに熱心な国のひとつとしてブルネイがあるが、ホテルをはじめとする関連施設が完成したきっかけはやはり国際会議だった。

二〇〇〇年、アセアンの最小国ブルネイはAPEC年次会合のホスト国となった。首脳会議、閣僚会議の他、財務大臣会合と中小企業大臣会合が首都バンドルスリブガワンで開催されたが、その際、最古の王国を自負するブルネイ国が威信をかけて建設した会議・宿泊施設がエンパイアホテル (The Empire Hotel and Country Club) および国際コンベンションセンター (ICC) であった。

一九九四年から七年越しで、APEC開催の前月によくオープンしたエンパイアホテルは、南シナ海を望むリゾートホテルである。広大な敷地内にはジャック・ニクラウス設計のゴルフ場やスポーツクラブ、劇場なども完備しており、各施設間の移動はカートで行なう。豪華な客室はもちろん、ゴルフやスポーツクラブ、スパなどがそれぞれ独立し



2005年APEC財務大臣会合が行われた韓国・済州島「済州新羅ホテル」。同ホテルはこれまで各国との首脳会談などにも使われており、右上は小泉首相、クリントン元大統領などが会見した野外の記者会見場。右下は首脳会談の場としても使われた宴会場。

たとえば、二〇〇五年に韓国で行われたAPECの場合、一月に最後の首脳会議がヌリマルAPECハウス（釜山）で行われるまで、前年二月の慶州コンコードホテルでの財務関係実務者会合を皮切りに、ソウル、仁川、大田、大邱、光州、横城など、韓国全土のホテルで一年に渡って様々な会合が開催された。そのうち、二〇〇五年九月にはAPEC財務大臣会合が済州島で行われたが、会場として選ばれたのはオークラホテルズ&リゾーツのひとつである済州新羅ホテルだった。このホテルは一九九六年の米韓首脳会談の際、米国クリントン大統領（当時）がスピーチした場所でもある。こうしたVIPの来訪はその後の会議誘致において連鎖を生むものらしい。

VIP連鎖で象徴的なのは首脳の写真撮影だろう。サミット（主要国首脳会議）で恒例となった首脳の集合写真は他の国際会議でも付きものだが、スピーチデスクのロゴばかりでなく、世界中のメディアに露出する写真、映像で、背景としてホテルの存在をさりげなく示すことは非常に重要となる。

### MICEツーリズム

民間の取り組みばかりでなく、国策として

たアトラクションとして楽しめる。現在、日本からは直行便がなく、渡航地として一般に馴染みの薄いブルネイだが、金曜日（休日であるなど）、アジアで最も敬虔なイスラム国として、特に米同時多発テロ（九・一一事件）以降、西欧諸国への観光旅行が難しくなったアラブ諸国からのイスラム教徒観光客を引きつけている。

他のアジアの五つ星ホテルの中にも、様々な国際会議受け入れを契機に建設されたり、改装されたものが少なくない。大理石張りなど豪華で大作りなロビーの一隅に、国際会議をはじめとした国賓来訪の写真を掲げているホテルもある。

なかには立地や他のホテルとの競争で開設当時の高級路線を維持しきれず、メンテナンスも行き届かなくなり、そうした写真が過去の栄光に堕ちてしまう例もある。しかし、多くの国々で官民一体となったホテル建設が行なわれているのは、何より国際関係の表舞台で自国の存在をアピールするためでもある。なぜなら国際会議の受け入れには、それぞれの国の政治、経済力ばかりでなく、ホテルに代表される受け入れ環境が大きくものをいうからだ。



ホテル空間に「交流文化」を読む

# ジェフリー・バワ 多文化化する身体

稲垣 勉 (観光学部)

ホテルを構想、計画、設計する人間の文化的背景は、  
ホテル空間に見事なまでに体现される。  
アマンリゾートに多大な影響を与えたといわれる  
セイロン生まれのポストコロニアル建築家の肖像。

写真/稲垣勉、松岡宏大

不特定多数の人々が集まる空間という性格から、ホテルが交流の中心として機能するのは当然の成り行きと言えよう。またわが国を例にとっても、西欧文明の視覚化された象徴として導入されたという経緯が示す通り、ホテルは文化を伝播させ、新しい文化をつくり出す触媒として機能してきた。いっぽう空間としてのホテルそのものにも文化的背景は結実している。ホテルを構想、計画、設計する人々の文化的背景は、ホテルをつくり出すという行為を通じてホテル空間に強い影響を与え、時として商品価値のかなりの部分を決めてしまうことすらある。ことに多様な文化的背景が、重層的に折り重なった旧植民地のホテルではこの傾向が色濃い。

## 旧植民地のリゾートホテル群

文化的背景が結実していると言っても、商品としてのホテルの寿命は決して長くはない。どれほど念入りに計画され、どれほど豪華に作られようとも、ホテルの空間は消費され使い捨てられていく。このためホテルでは、かなりの頻度で定期的リノベーションが実施され、フェースリフトが行われる。このライフパンを決定しているのは、「人を収容する





器」としての物理的耐久年限ではない。むしろ市場から飽きられ、商品価値を失うことでライフスパンが決定される。陳腐化と定期的なリノベーションの必要性は、ホテルが商業施設である以上、逃れられない宿命といつてよい。

これら一連の事情を反映して、現代のホテルは定期的にリノベーションし、造り替えることを前提にして計画され、建設されていく。いきおいその時のムードに合わせて口当たり良い造形や材質が選ばれるものの、その実、浅薄な印象は免れ得ない。こうした事情を背景に、ホテルでは記号的価値を求めて、躯体の設計に有名建築家が起用されることはあっても、内装を含めたホテル全体の設計を依頼することはまれである。施主としてのホテル事業者にとって、オリジナリティへの配慮を要求される有名建築家による設計は、時として商業施設として命取りになりかねない。しかしなかには、オリジナルのデザインスキームを保って修復され続け、同時に商品価値も維持するという例外が存在しないわけではない。旧植民地スリランカの建築家ジェフリー・バワの一連のリゾートホテル群は、この典型である。

### 商品価値を持ち続けるバワのホテル

ジェフリー・バワによるホテル計画は六〇年代半ばにさかのぼる。しかし実際に完成し始めるのは、七〇年代近くになってからであり、半身不随に陥り、言葉を失う一九九八年までの約三〇年間に、完成したホテルは一〇か所をわずかに上回るにすぎない。一〇か所という数に対する評価は難しい。これはバワが関わったホテルのほとんどがスリランカに所在していることと深く関係している。建築家という職能が確立しているとは言いがたいスリランカの国情を考えれば、特定の有能な建築家にプロジェクトが集中することは当然の成り行きであろう。一方で内戦の影響から、優れた観光資源を持ちながら、離陸の機会を失いは少なく、新規のリゾートホテルプロジェクトはきわめて限定されていた。

この理解に立てば、植民地時代からの遺産としてのコロニアルホテルを除き、バワはスリランカのリゾートホテルの歴史を築いてきたといっても過言ではない。バワが染色など様々な分野の芸術家、クラフトマンの協力を得て手がけたのは、建物外観の意匠ばかりで

はなく、内装からランドスケープに至るホテル全体であり、さらにごく一部の例外を除けば竣工当時のデザインスキームを、忠実に維持しながら、商業施設として機能し続けていることは特筆に値しよう。

バワによるホテルは、使い捨てを前提とした前述のホテルとは大きく異なっている。しかしこのバワのホテルに見られる特徴を、スリランカにおける経済・社会状況の特殊性で説明することには限界がある。また有名建築家の記号的なブランド効果として、説明するだけでも不足であろう。バワのリゾートホテルが商品価値を持ち続けている理由は、バワの創り出したホテル空間自体の中に求められるべきであり、そこに実現する文化的背景に求められるべきであろう。

前述のように六〇年代半ばから、バワはロンボ・ヒルトンのデザインスタディなどホテル関係のプロジェクトを始めている。しかし最初の実作は六七年から開始され、六〇年代終わりに完成するベントータ・ビーチ・ホテル (Banota Beach Hotel) とセレンディブ・ホテル (Serdib Hotel) である。ことに前者は観光誘致のための最初の国家的プロジェクトと言われる国策ホテルであり、限られた資



1 沐浴場を思わせる中庭の池 (ベントータ・ホテル) 2・3・4 客室内に露出する木で作られた小屋組、コンクリートで造形された階段などバワ独特のボキャブラリーによる室内 (クラブ・ピラ) 5・6・7 自然に覆い隠された建物の各所には、バワを支える職人達が手作りした家具が配されている (カンダラマ・ホテル)



金、輸入制限の中、地元素材を使って作られた、大屋根や沐浴場を連想させる中庭などヴァナキュラーな性格の強い施設である。

しかしここで注目すべきは、これらホテルの持つ地場的な性格ではない。重要なことは、これらのホテルがバワが建築家として出発してからわずか二〇年あまりしか経っていない時期に計画されたことと、同時にその時すでに彼自身が四〇代後半にさしかかっていたという事実である。

### 混血の放蕩息子「自分探しの旅」

バワの建築家としての出発は遅い。バワは一九一九年にセイロン（現スリランカ）で生まれ、裕福な法律家だった父はヨーロッパ人との混血であり、母も同様であった。現地エリートの子弟としてケンブリッジに留学し、英文学で学士号を取得する。その後、法律に転じロンドンで見習いを始めた彼は、第二次大戦後故郷のセイロンに戻り、法律事務所のパートナーとして独立する。しかし法律事務所勤務は長続きせず、四六年には財産を処分して、グランドツアーに出発する。インド洋、太平洋を経てアメリカに渡り、さらにはヨーロッパに移って、イタリアのガルダ湖を見下ろす別荘に居を構えることとなる。<sup>\*1</sup>



いわば「自分探しの旅」とでも言うべき、お気楽なこの期間、頭の良い金持ちの放蕩息子としてのバワは、色白で金髪に近いこともあって、不全感を抱えながらも無自覚に西欧文化の中にいたと考えて良かろう。しかしセイロンに呼び戻され、荘園を購入してイタリア風庭園の中にイギリス風のカントリーハウスを建てようとしたときから、西欧文化との付き合い方は大きく変化する。南アジアの風土の中に於けるイタリア式庭園、イギリス風カントリーハウスはあくまでも矛盾であり、両者の間の折り合い無しには存立し得ない概念である。これがバワを建築に向かわせるきっかけとなる。

再度イギリスに渡って、建築を志したバワにとつて、建築家になるということは、自らの血の中に併存する西欧とセイロンの伝統を統合していくプロセスに他ならない。より社会的な視点からすれば、植民地時代、ポルトガル、オランダ、イギリスと幾重もの文化移転によつて結果的に生じた生活レベルの文化混濁を、意図的に芸術に転化させていくことといえよう。こうしてバワは三八歳にしてはじめて建築家として独り立ちする。初期からバワが、きわめて高度なかたちでヴァナキュラーな造形と西欧的な感覚、さらにはインターナショナル

リズムを融合させ得たのは、こうした背景に依っているとみなしてよかろう。バワにとつて折衷的に見える様式は、観念の産物ではない。それは多文化的であり同時に土着的であるポストコロニアルな彼自身の身体から発したものであり、それ故に動かしがたい重みをもってわれわれに迫ってくる。建築家として出発する前の無為とも思える三七年間は、それを可能にする熟成期間だったということが出来よう。

### 生活と遊びの高次な融合

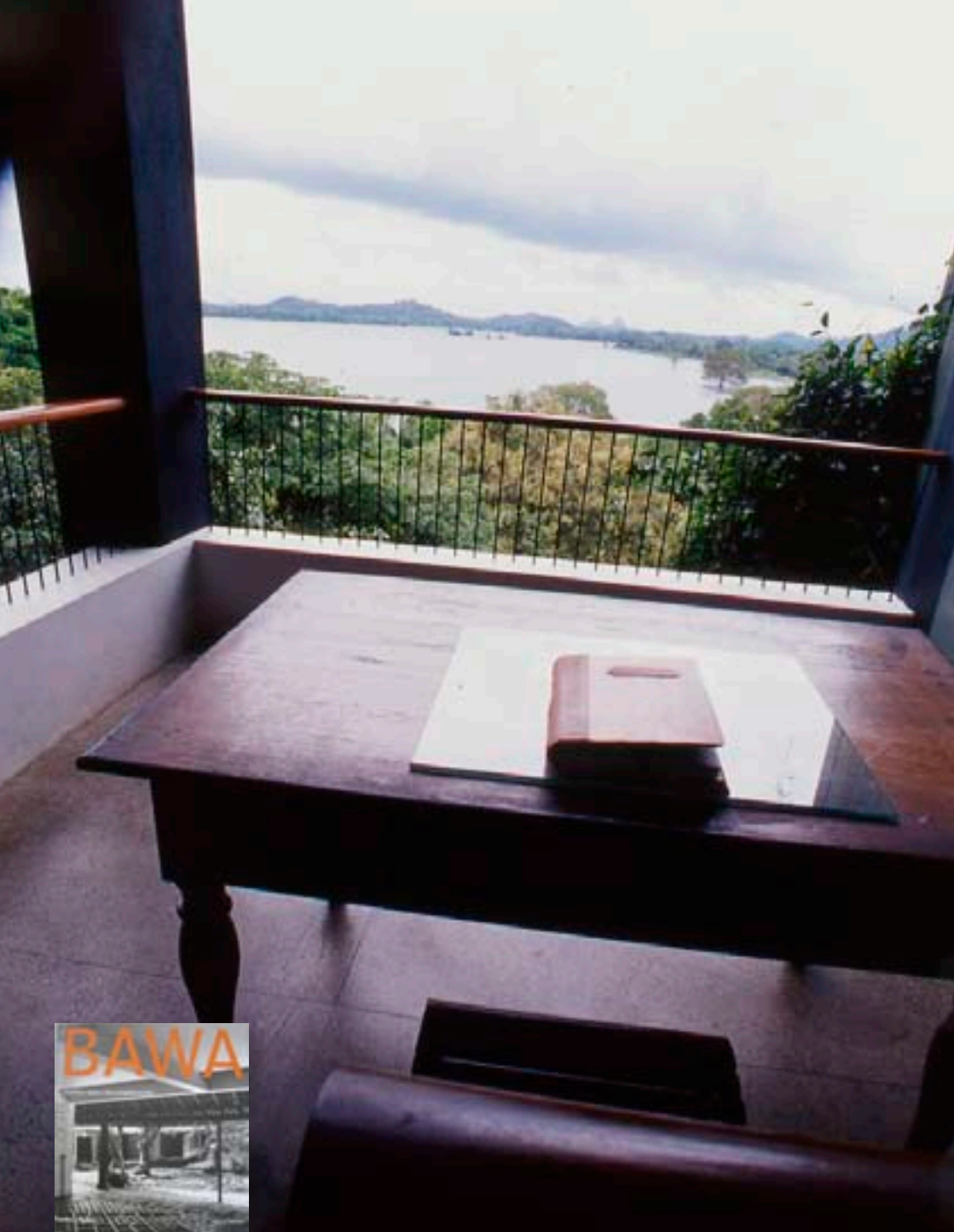
もうひとつバワのホテルが商品として長いライフサイクルを享受できる背景として、商業施設としてのホテルに求められる条件が、建築家としてのバワの資質や方向性と大きく重なり合っていることが指摘できよう。ホテルは生活空間であると同時に、「遊びの場」であり「楽しみの場」である。ことにリゾートホテルではこの性格が強い。生活空間としてのホテルと、遊びの場としてのホテルでは方向性が大きく異なる。しかしホテルは、この二つの方向性の高次な融合によつてはじめて商業空間として高い可能性を持つ。

生活空間としてのホテルに求められる要件は、意識を刺激する造形でもなければ、際だつ



1 植民地から新生国家スリランカへの歴史が象徴されたエントランスホール螺旋階段の彫刻群（ライトハウス・ホテル） 2・3・4 海と連続するかのようなプール。装飾を排した長い回廊がミニマルで象徴的な空間を作り出す（ブルーウォーター・ホテル）





バワの作品集『Geoffrey Bawa: The Complete Works』と彼の書斎（カンダラマ・ホテル）

たエキゾティシズムでもない。「居心地の良さ」

こそが、もつとも重要な要件であろう。バワはその生い立ちや、コロンボの街をロールスロイスで疾駆したという若い日の「遊び人」生活からして、さまざまな意味での「良い生活」を知り抜いた人である。バワのつくりだす客室には、奇をてらったしつらえはない。しかしそれでいて必要にして十分な質感を持ち、彼自身のアイデンティティを獲得している。ことに低層で小規模な施設ほど、この特徴が際立つ。西海岸のリゾート地ベントータに立地するクラブ・ヴィラ (Club Villa) はこの典型であろう。落ち着いた室内には、バワを支え続けた地元クラフトマンによる家具、タペストリーなどを除き、ほとんど装飾らしきものは存在しない。しかし上質で、居心地の良い、きわめて昇華されたコロナール空間が構成されている。

一方でバブリック部分、ことにエントランス、ロビー、廊下など人々が流動するところほど、きわめて大胆で「けれん味」にあふれた意匠が用いられる。いわゆる文化三角地帯に立地するカンダラマ・ホテル (Kandalama Hotel) を例にとつて考えることにしよう。岩山を切り裂くように外部に露出したレセプションデスク、そこからテラスに続く暗い廊下には岩

盤がむき出しであらわれており、湖を見晴らすテラスをより劇的に見せている。

バワの建築の多くは、厳密な設計図なしに施工されるという伝説がある。カンダラマ・ホテルの廊下に露出した岩盤も、斜面に埋め込まれたように建つホテルを、施工する過程で採り入れられたものだと考えられている。バワはスリランカの施工技術の低さという欠陥すらも、織り込みながら自らの世界を構築していく。

カンダラマ・ホテルの最上階、ダイニングルームに続くロビーには巨大なフクロウのオブジェが翼を広げている。ホテルとしての最後の作品となったライトハウス・ホテル (Lighthouse Hotel) の彫刻付きの螺旋階段は、立地する植民港湾都市ゴール (Galle) の歴史を象徴的に表している。ブルーウォーター・ホテル (Blue Water Hotel) の、建物を突き抜けて海に向かって延びる回廊も、シンボリックな造形であろう。また全体に控えめなクラブ・ヴィラもバブリック部分は、中庭に池を配し、仏像やヒンドウーの神像に彩られた饒舌な空間をかたちづくる。

これらが「けれん」であることは言を待たない。しかしリゾートホテルが「遊びの場」である以上、ある種の「けれん」はどうして

も必要であり、静謐な居住空間と「けれん味」にあふれたバブリック部分を組み合わせるバワの老練な手腕が、魅力的なリゾートホテルを創り出している。

### せめぎあう身体の延長としての建築

建築は使い手無しには意味を持たない。ことに商業建築であるホテルはこの制約から逃れることは不可能である。バワは居心地の良さと大向こう受けする造形を大胆にくみあわせることで、使い手と向き合ってきた。しかしバワが用いる造形、意匠は施工水準などの技術的必然性、彼自身に体现される植民地としての文化混淆の必然性から導かれるもので、単なるマーケティング上の必然性に立脚したものではない。これがバワのホテル群きわめて長い商品生命を与えている。バワの建築は旧植民地スリランカの重層的な文化的伝統と、西欧的な知性とがせめぎ合うバワの身体そのものの延長である。同時にそれが、自らの中にある西欧と土着との間のアイデンティティを確認するために費やされた、一見無為とも思える三十七年の歳月に支えられていることは言うまでもなからう。

引用文献

\*1 Robson, David, Geoffrey Bawa: The Complete Works, Thames & Hudson 2002



# Fujiya Hotel

## 「富士屋ホテル」見学

### 大橋研究室

アジアにおける「ホテル」の社会・文化的意味を探ることをテーマとしたゼミナールを現在展開している大橋研究室では、2006年5月12日、神奈川県足柄下郡箱根町の富士屋ホテルを訪問した。参加した学生たちはそれぞれの問題意識に基づき、同ホテルを1日かけて見学した。

写真/佐藤憲一 協力/富士屋ホテル

富士屋ホテル「花御殿」の客室にて



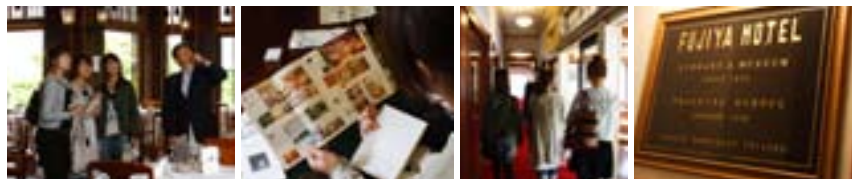
# アジアにおける「ホテル」という現象の 社会・文化的意味を探る

大橋健一（観光学部）

立教大学観光学部大橋研究室では、社会学および文化人類学の観点から、ここ数年、アジアにおける「ホテル」という現象の社会的、文化的意味を探る作業を継続的に進めている。

「ホテル」という西洋起源の施設が、地球規模での人間と文化の移動と交流の歴史的展開の中で、アジアという非西洋世界にどのように接合されたのか、グローバルなるものとローカルなるものがせめぎあう文化空間としていかに成立してきたかを文献研究やフィールドワークを通して説明することがその目的だ。

ゼミナール（演習）での調査研究に参加する学生たちは、社会学や文化人類学をはじめ、歴史学、建築学など関連領域のさまざまな研究成果や理論にも目を配りながら「ホテル」という研究対象に多面的に接近することによって、「ホテル」という現象に象徴的に投影されたアジア諸都市の複合的でダイナミックな文化の様相を理解することを目指している。これまで香港、ペナン、シンガポール、奈良、日光などの調査を行ってきたが、今後さらに多くの事例研究を行い、成果を蓄積してゆく予定である。

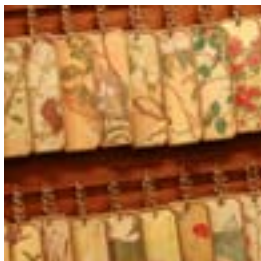






富士屋ホテルの建物は「本館」「西洋館」「花御殿」「ダイニング棟」「フォレストロッジ」「カスケードルーム」などに分かれている。それぞれ異なる建築年に応じて外観のデザインも異なっている。参加学生はホテルの各所を見学し、館内のいたる場所に施されている和洋折衷の意匠に注目しつつ、それが当時の宿泊者にとってどのような意味を持ったかなどを考察した。





昭和11年当時使われていた客室の鍵（現在は展示のみ）。「花御殿」では全43室すべて花の名前が付けられている。



「マジックルーム」の中央に置かれた暖炉。タイルの上の鯉の装飾が一風変わった。



二代目社長山口正造氏をモデルにしたといわれる「鬼の顔」がダイニングの柱に鎮座している。



1930（昭和5）年に建てられたメインダイニングの建物の外観。当時は日本文化への入口としての意味がこめられていたのではないかと。



花御殿の客室の照明は純和風。和洋折衷の様式はホテルの各所で見る事ができる。



1920（大正9）年に建てられた宴会場「カスケードルーム」には、箱根の風景を描いたレリーフがある。



メインダイニングの天井にも花が描かれていて不思議な雰囲気。日本文化を体験したい西洋人にとってこの空間は大事だったのではないかと。



花御殿の表玄関の和風屋根の上に、西洋風のライオン像が載っているのを発見した。



日本庭園を望めるティーラウンジ「オーキッド」。和洋が折衷した明治の面影を残す空間でもある。



ガラスで囲まれたサンパラー。回転扉のエントランスからフロントに上がる階段に龍の飾りがある。



かつて宿泊者の余興として手品をやっていたことから「マジックルーム」と名付けられたフロント脇のラウンジ。



外国人宿泊客のために作られた当時は珍しい室内温泉プール。箱根の天然温泉使用。



1906（明治39）年に建てられた西洋館。典型的な明治の西洋建築だが、玄関は唐破風の曲線のある屋根を持つ。

## Fujiya Hotel

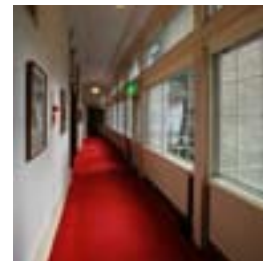
## ゼミナール報告会から 2006.5.16

見学を終えた学生たちは、現場での各自の問題意識に沿ってカメラで押さえた写真を整理し、ゼミナールでの報告へ向けて準備を行った。ゼミナールの場では、各自の用意した写真をスライド上映しながら、見学の成果を報告しあい、ディスカッションが行われた。





客室のクロゼットの広さに驚く。当時の旅行スタイル（船旅）がうかがえる場所だ。



本館と西洋館をつなぐ通路。富士屋ホテルでは館内や通路にBGMが流れていないことに気づいた。



富士屋ホテルの歴史を語る資料室には、昔の宣伝ポスターや旅行パンフレットなどが展示されている。

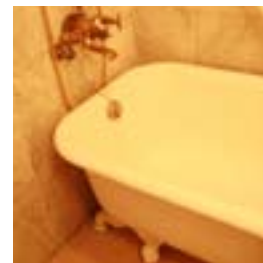
一八七八（明治一一）年開業の富士屋ホテルは、日本の近代観光産業の歴史そのものともいへき由緒あるホテルです。その歴史を知ることは、日本における近代観光の歴史を学ぶことにほかなりません。

さらに、富士屋ホテルは立教大学観光学部と歴史的に深いつながりがあります。立教大学における観光教育の歴史は、第二次大戦終了直後の一九四六年に開設された「ホテル講座」に遡ります。この「ホテル講座」の開設資金は箱根富士屋ホテル第二代社長・山口正造氏の遺産によってまかなわれました。

## 富士屋ホテルと立教大学観光学部



ホテル玄関部分を見ると、いかにも西洋式ホテルのようだが、ホテル本館の外観は瓦屋根の和風建築。この上下の対照が面白い。



客室の内部は旅館のような和風仕込みだが、トイレやバスルームなど水まわりは洋風になっている。

# Fujiya Hotel

## 見学を終えて

今回の「富士屋ホテル」見学は、今後本格的に展開する調査研究への導入として、ゼミナールに参加して間もない二年次生の学生が行ったものである。ゼミナールは二年次からスタートし、四年次までの三年間をかけて各学生が関心を持った観光に関わる個別の領域をじっくり学んでゆく場だが、大橋研究室の二年次のゼミナールでは、問題意識を養い、調査研究の枠組みや分析のための視座を身につけるためのさまざまなプログラムが用意されており、教室での文献研究やディスカッションと平行して、実際にものごとが生起している現場（フィールド）に身を置き、そこからさまざまな問題を発見することを重視している。

今回見学に訪れた「富士屋ホテル」は、わが観光学部と歴史的に所縁の深い場であることもさることながら、まさに人間の移動と交流が生み出す文化の複合性やダイナミズムを五感を通じて実感できる貴重な場であり、見学を行った学生たちはさまざまな研究上のインスピレーションを得たに違いない。

（大橋健一）



### 山口正造

富士屋ホテルの基礎を築いた人物で、アメリカへ視察にいきホテル事情を学ぶなど時代の先駆者でもあった。国際交流を重視し、万国髷倶楽部を開設したり、日本を旅行する外国人に文化・歴史・風俗を知ってもらおうと、メニューの裏にこれらを簡単に印刷して食事中の読み物としてサービスした（「富士屋ホテル」ウェブサイトより）



箱根・宮ノ下  
富士屋ホテル  
神奈川県足柄下郡箱根町宮ノ下359  
Tel.0460-2-2211 Fax.0460-2-2210  
http://www.fujiyahotel.co.jp/



1891 (明治24) 年竣工の本館。唐破風の玄関を持つ木造洋風建築。1Fがロビー

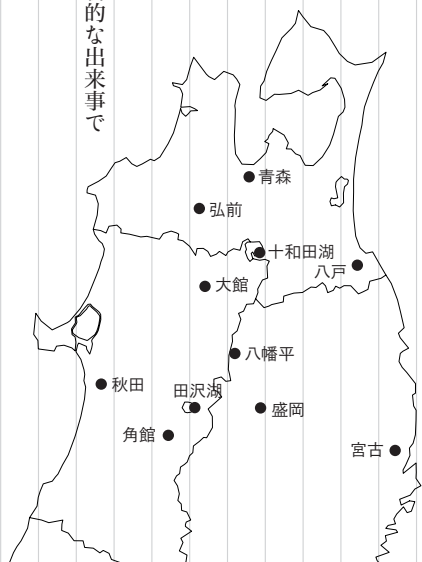




# ゲートウェイシティ盛岡の誕生とホテル

松村公明 (観光学部)

岩手県盛岡市は、東北新幹線の開業に向けて、空前のホテル建設ラッシュを経験した。ホテルの集積は盛岡をめぐる人の流れと地域の枠組みをどう変えたのか、都市地理学のフィールドノートから眺めてみよう。



方都市にとって、革新的な出来事であった。

## なぜホテルに着目したのか

一九八二年の東北新幹線大宮―盛岡間の開業は、奥羽山脈を境界とする「太平洋側」と「日本海側」という伝統的な地域的枠組みを再編するきっかけとなった。それは、盛岡の地理的位置が、首都圏・仙台都市圏から、宮古、八戸、青森、弘前、大館、秋田などの主要都市と、十和田湖、八幡平、田沢湖、角館をはじめとする主要観光地を訪問するための玄関口に「置き換え」られたことに起因する。

盛岡地域調査の機会を得た一九九〇年当時、わが国の地理学界では、都市域のホテルに焦点を当てた研究はほとんど蓄積されていなかった。たとえば、都市地理学の主対象の一つである都心は、中心業務地区として、オフィス街、中心商店街、官庁街などによって構成され、宿泊を担うホテル・旅館は、あくまでも補完的な機

能と見なされていた。しかし、この前年に行った福島県郡山市における都心調査の結果、地方中心都市の都心では、バブル経済の波及とともに土地利用の更新が進み、とくに中高層化の進展の過程で、ホテル空間が著しい拡大をみせていることがわかった。そこで、盛岡では当初進めていた中心商店街の調査を中断し、急きょホテル・旅館の調査に切り替えてみた。



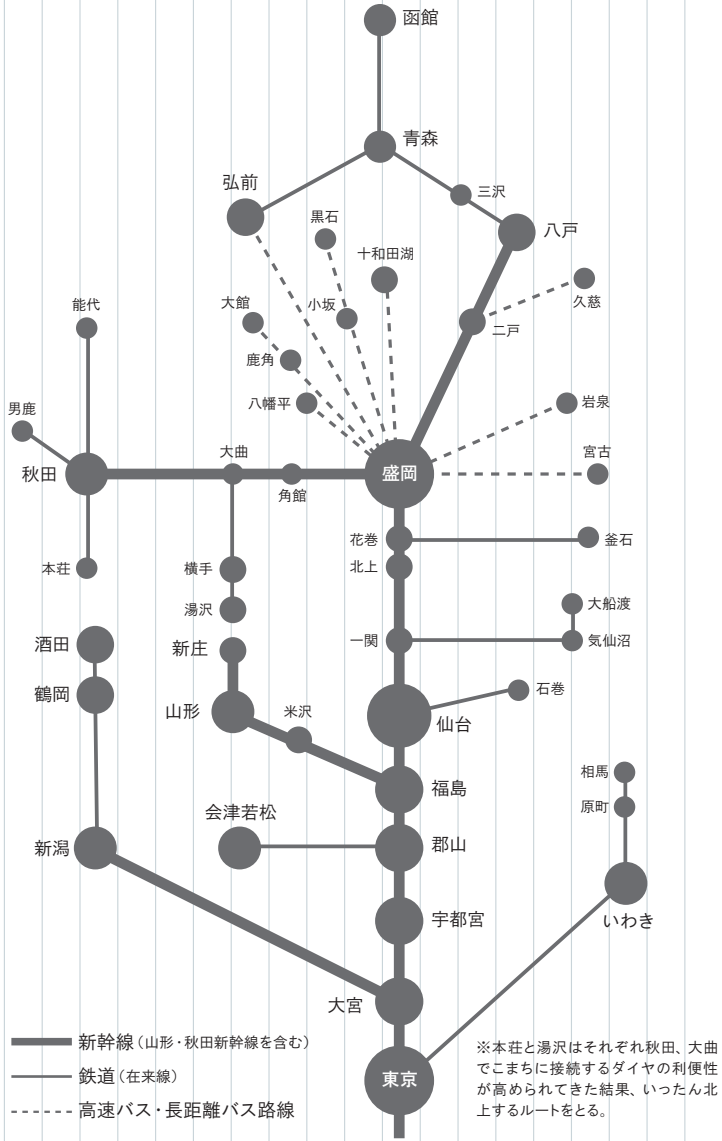
盛岡駅前地区の眺望(1997年3月撮影)。同地区は、北上川(手前)と雫石川に挟まれた半島部に位置する。2006年までに、写真の範囲には新たに5館のホテルが進出している。写真奥は、南部富士と称される岩手山(2038m)。

心部と盛岡駅を結ぶ唯一の通路であった開運橋上流に二本目の通路として旭橋が架橋された。もちろん盛岡駅前は全面的に再開発され、肴町大通りに加えて、都市軸に沿った新たな三つ目の商業中心となるように促された。このような都市構造の変化は、同時期に形成されたホテルの集積地域に色濃く反映し、なかでも盛岡駅との距離が、客室を主体とするビジネスホテルと、宴会場などの付帯施設を重視したシティホテルの立地場所をそれぞれ規定していることを確認していった。

てを飛び込みで訪問し、インタビュウを実現させることに尽力した。インタビュウの主眼は、それぞれのホテル・旅館の規模と機能に、都市構造変化の軌跡を読み取るうとすることにあった。盛岡では東北新幹線開業に向けて、これまで市街地の末端に位置づけられてきた盛岡駅を、もう少し市街地の中心に引き寄せようとする試みがなされていた。たとえば、盛岡の老舗百貨店「川徳」は、創業の地・河南地区(藩政期の町人地)から、より駅に近接する河北地区(藩政期の武家地)に移転した。また、都

しかし、インタビュウを進めるうちに、ホテルをめぐるもう一つの重要な地理的側面が、フィールドノートの余白に窮屈に書き込まれていた。それは「東北新幹線の整備によって、首都圏・仙台都市圏から盛岡までの時間距離が短縮したにもかかわらず、なぜ、盛岡の宿泊需要が高まりをみせているのか?」という疑問に対するホテルマン達の回答であった。実際に、一九九〇年代前半には、盛岡のホテル客室総数は、東北地方では広域中心都市・仙台に次ぐ第二位、遠隔地として早くからホテルの





**関連文献**

- 松村公明(1991):盛岡市中心市街地における宿泊施設の分布パターン。地域調査報告, 第13号, pp.175-189.
- 松村公明(1992):郡山市中心部における都心機能の分布と集積過程。地理学評論, 第65巻, pp.889-910.
- 松村公明(1996):仙台市における宿泊機能の立地特性。地学雑誌, 第105巻, pp.613-628.
- 松村公明(2001):高速交通体系整備下における北東北地方の地域的枠組み——盛岡と秋田の事例を中心に——。日本地理学会発表要旨集, 第60号, p.18.
- 松村公明・秋田大学地理学研究室学生(2006):盛岡市を結節点とする広域観光ルートと「材木町市」に関する地理学的考察。秋大地理, 第53号, pp.37-42.
- ゴットマン, J.・ハーバー, R. A. 編, 宮川泰夫訳(1993):『メガロポリスを越えて』鹿島出版会、350p.

変化し、今日の地域的枠組みが再編される兆しがある。それは、東北新幹線の新青森延伸(二〇一一年予定)と、さらに新函館延伸(二〇一五年予定)に向けて、盛岡を拠点に形成された後背地空間が、著しく縮小すると推察されるためである。業務や観光

のために日帰り圏外から大量に流入する人々は、新たに誕生するクロスロードに導かれ、そこに接触の場所は求めるであろう。間違え可能性が高い未来の予想をフィールドノートの余白に書き記しておこう。

集積が進んでいた秋田の数字を抜き去ってしまった。

### ホテルマンの話がヒントに

大阪の企業の営業マンが、さいたまや横浜や千葉を巡回する場合に、東京にホテルをとるのが効率的であるのと同じ現象が盛岡で起こっていた。東京や仙台から来訪する企業の営業マンの中には、青森、岩手、秋田の三県(いわゆる北三県)担当が含まれ、彼らは秋田や大館、弘前、青森、八戸、宮古など北三県の主要都市を巡回する際に、盛岡に長期宿泊することによって、いずれの都市へも盛岡からの日帰りが可能となる。同様に、これら主要都市に常駐する担当者が一堂に会する場合にも、盛岡のホテルに会議室を予約するのが最も合理的であった。

このような業務客の行動パターンは、少なからず観光客にもあてはまった。たとえば、盛岡ホテル協議会では、冬季観光客の落ち込みを改善するため、盛岡近郊に位置する複数のスキー場との間に送迎バスを運行していた。スキー客にとっては、盛岡のホテルに長期宿泊すれば、日替わりでさまざまなスキー場を楽しむ仕掛けになっていた。

そもそも石油ショックによる高度経済成長期の終焉がなければ、東北新幹線は一九七六年に東京―盛岡間で暫定開業の後、三年後の一九七九年には東京―青森間で全線開業の予定であった。しかし、東北新幹線が大宮から上野へ(一九八五年)、さらに東京へ(一九九一年)乗り入れを果たしても、いわゆる「盛岡以北」はピクとも動かなかった。結局、東北新幹線は一九八二年の開業

から二十年間もの間、盛岡にとどまることになることになったが、それをいったい誰が予想できたであろうか。

この間、盛岡は「首都圏・仙台都市圏―盛岡以北」を結びつける Gateway City としての拠点性を着々と確立してきた。とりわけ、盛岡の後背地が「盛岡以北」に加えて、秋田、大館、弘前といった「日本海側」に展開したことは、盛岡の拠点性をいっそう高めた。二〇〇六年、秋田新幹線「こまち」が盛岡―秋田間を一日十七往復する一方、東北道高速バスが盛岡―大館間(十四往復)と盛岡―弘前間(十五往復)を緊密に結んでおり、これは地方都市間高速バスの運行頻度としては、わが国最高水準となっている。かつて「北三県」と形式的に呼ばれた地域は、今や「北東北」という実質的な意味を持つ地域的枠組みへと成長してきた。

### フィールドノートの余白

私にとってホテルとは、人の流れと地域の枠組みが投影されるベースキャンピングであり、研究の基点でもある。メガロポリスの命名者であるジャン・ゴットマンはつぎのように述べた。「多くの巨大都市における一時的訪問者のためのホテルや他の宿泊施設の役割は、そこに集まってくるような種類の人間集団のもう一つの側面へと我々の注意を引きつける。中心都市はこれまで常にクロスロードであり、接触の場所であり続けた」(ゴットマンほか編 一九九三)。

今後一〇年のうちに、「北東北」をめぐる人の流れは大幅に



## 読書案内

特集に関連する書籍の中から今回選んだのは、ホテルの文化的意味を考えるのに最適な二冊。

文化装置としてのホテルが  
社会に果たした役割

## ホテルと日本近代

富田昭次 著  
青弓社(二〇〇三) 二〇〇〇円十税



## 来

日する西洋人をもてなすためには西洋式の宿泊施設であるホテルが必要になる。ハコモノとしてのホテル建築を提供するだけではな

く、ソフト面でも西洋料理を正餐として供し、娯楽やレクリエーションの面でも西洋人の満足度を高める工夫を行わなければならぬ。先見性を持った実業家がそれらに取り組んだだけでなく、国家も政治的にかかわって実現してきた。政治やビジネスのために滞在する都市部だけでなく、避暑のために訪れる高原でもホテルが建設され、その後はリゾート地として発展している。

ホテルの建設を通して地域の整備が進み都市が発展する様子を目の当たりにして、ホテルが近代的な国家の象徴であることを悟った政府は、植民地・満州の都市計画においても対外的に国威を示す手段として近代的なホテルを建設するようになった。

このようにホテルは西洋人の文明についての価値基準においてライフスタイルが大きな役割を持つことを示し、戦略的に利用されるよ

うになったと富田は指摘している。具体的には、近代の日本におけるホテルの普及過程とその役割の変化を客観的に捉え、ホテルが日本の文明開化から近代化、更には国家戦略において果たした役割を明らかにしている。ホテルの持つ文化的な側面が今後のホテルの方向性を予感させるものであることを説いており、文化装置としてのホテルが社会において果たす役割について深く考えさせる一冊である。

ホテルはどんな意図に基づき  
建設されてきたのか

## 日本ホテル館物語

長谷川堯 著  
プレジデント社(一九九四) 三二〇〇円(税込)



## 本

書は建築評論家である著者が一九七四年から雑誌『商店建築』に連載した「日本ホテル館物語」の原稿をまとめて再構成したものである。

高度経済成長によって日本が戦後復興を成し遂げたとされて間もない一九七三年にオイル・ショックが起こった。それまでに、経済だけでなく人々の生活レベルも標準的な先進国のレベルに追いつい

たとされていたが、西洋式ライフスタイルを体現するホテルはまだまだ庶民が日常的に利用するまでには一般化しておらず、漸く普及の兆しが見え始めた頃であった。あいにくオイルショックによる

景気後退によって一般の人々のホテル利用が爆発的に拡大することはなかったが、今日のように普及する下地はこの時期に作られた。今でこそ建築意匠デザインの檜舞台になっっている商業建築であるが、この当時はまだ建築意匠デザインの中ではメジャーな分野ではなかった。その中においてホテルは唯一例外的に建築デザイナーの仕事として評価される存在であったが、商業建築の一つであるホテル建築の歴史を検証しようという建築批評家は希有な存在であった。

国家的威信のかかったプロジェクトとしてホテルが建設されて来た経緯もあり、社会環境の変化の影響を直接受けて変貌してきた事実を著者は詳細に捉えて記している。この本を通じて、日本におけるホテルの変遷が理解できるだけでなく、ホテルを取り巻く環境の変化がいかに起こり、その過程の中でどのような意図に基づいてホテルが建設されたのかを読み解くことができる。

日本では、時代の変革期に優れた建築家が登場してホテルの形態のあり方に方向性を示し、その後のホテル建築の発展の道筋を示してきたと著者は指摘する。彼らに設計の仕事を託す発注者の意図や度量、さらには、美意識にまで言及し検証するという点も非常にユニークで、都市におけるホテルの文化的役割や建築家の社会的役割についても再考するきっかけとなる一冊である。





# ディズニールランドと中国のテーマパーク開発

急速に経済発展の進む中国では、近年テーマパーク開発が注目されている。数多くの観光開発プロジェクトに参加し、学問的な立場から助言を与えてこられた中山大学教授・保継剛氏に香港ディズニールランドの事例を中心に中国のテーマパーク開発の現状について講演いただいた。

「ディズニールランドと中国のテーマパーク開発」  
保継剛（中山大学教授  
地理科学・計画学院院长  
観光発展計画研究センター長）  
二〇〇六年一月二日  
池袋キャンパス  
一一号館A二〇四教室

二〇〇四年九月にオープンした香港ディズニールランド。その中国進出は日本でも大きな話題となった。しかしながら、中国でテーマパークを経営するということは、未だ厳しい状況にある。

## 数少ない成功例「錦繡中華」

一九八二年、広東省中山市に中国において初めてテーマパークがオープンした。その後、一九か所の遊園地がオープンしたが、次々と閉鎖し、その中で現在も運営しているのは、わずかに二か所にすぎないのが現状である。

こうした状況の中で、八九年深圳市にオープンした「錦繡中華」は、中国におけるテーマパークの成功例のうちの数少ない事例のひとつである。中国各地の名所旧跡を敷地内に再現したもので、当時一億円に相当する投資額がわずか一年間で回収できたといわれる。「錦繡中華」が成功した要因はいくつか考えられるが、何より中国初のテーマパークであったこと、開発を進めたのが国营企業で政府から土地を無料で提供してもらえたこと、改革開放政策を掲げる政府の肝入りでつくり

れた新興都市であったため、もとより文化財は少ないことからテーマパークを観光資源として積極的に活用したこと、政府の宣伝などによる強力なプロモーションがあったことなどが挙げられる。

こうした話を聞いて、中国におけるテーマパーク開発には政府が大きく関与していることを強く感じた。同じことは、香港ディズニールランドにおいてもいえる。政府が資金面において相当なリスクを負っているのだ。日本のディズニールランドはオリエンタルランドという民間企業が運営しているのに対し、香港のディズニールランドは政府が五七%、ウォルトディズニール社が四三%の出資比率でつくられたのである。こうした点は、中国と日本におけるテーマパーク経営に関する最も大きな相違点である。

## 香港ディズニールの課題

これからの中国におけるテーマパークの展望を占ううえで、香港ディズニールランドの動向は大いに注目される。政府ははたして今後もそれだけの大きなリスクを負うことができるのか、資本金回収は本当に可能なのか。これだけの大型テーマパークを維持するためには、これから先も多くの来客者が来なければならぬ。東京ディズニールランドの入場者数が世界第一位であり、テーマパークとして成功している理由としてよく挙げられるのが、リピーター率が九割ときわめて高い点にある。

ところが、現に中国において、香港ディズニールランドの入場チケット料金は、中産階級の人々にとっても相当高い値段であり、経済的負担が大きい。またディズニールランドへのアクセスにも問題がある。中国本土からの客が多く、東京ディズニールランドのように首都圏から三時間以内で来られる客は限られているためだ。こうした理由からリピーターにつなげることは大変難しいと思われる。

目覚ましい経済発展を遂げている中国では、これからも大規模なテーマパーク開発が進められていくだろう。香港の次には上海でディズニールランドをオープンさせる計画がすでに決まっている。政府主導で大規模プロジェクトが進められる面が強い中国ではあるが、この先テーマパーク事業に民間企業がどのように参入し、いかに集客をはかっているのか。こうした課題をいかに克服するか、今後

も注目していきたい。（観光学科四年 桑崎裕子）

## 最近の観光学部講演会

開催日	講演者	演題	対象
4 / 6	塩島賢次 藤田リゾート開発株式会社 代表取締役社長	観光・ホスピタリティ産業の魅力 および現代的課題	本学学生、本学教職員
6 / 1	イサム・アリ・アルラウス スルタン・カブス大学 人文社会科学部部長	中東オマーンにおける 観光と文化の現状	本学学生、本学教職員
6 / 5	フランク・ゴー オランダ・エラスムス大学 観光経営学科長	オランダおよびヨーロッパに おける観光の現在	本学学生、本学教職員
6 / 29	シドニー・チョン 香港中文大学人類学系準教授	香港の観光ヘリテージを考える	本学学生、本学教職員
7 / 3	グエン・ティエン・ナム ベトナム国家大学ハノイ社会人文学部 ベトナム言語・文化学部専任講師	ベトナム文化を学ぶ	本学学生、本学教職員



### 保継剛 氏

中山大学教授  
地理科学・計画学院院长  
観光発展計画研究センター長  
中国を代表する観光地理学者であり、同時に観光計画の専門家。著書は『発展途上国観光計画とマネジメント』『都市観光の理論と実践』『観光開発研究—原理・方法・実践』など。





このコーナーでは観光学部が行う国際交流の現場を随時報告していきます。

# サウジアラビア、クウェート、オマーン 中東三か国を訪問して

小沢健市 (観光学部)



Prince Sultan College for Tourism and Business へ訪問した際の筆者と学部長との懇談



二〇〇五年九月末から約一週間、(財)中東協力センター主催のジャパンプログラム・ミッション派遣の一員としてサウジアラビア、クウェート、そしてオマーンの中東三か国を訪ねた。

私に課せられた課題は、三か国の大学、特に観光系ないしホスピタリティ系学部や学科を有する大学を訪問し、立教大学観光学部・大学院観光学研究科との間で学生や研究者間の相互交流の打診をし、高等教育機関への支援と交流の糸口を模索すること。訪ねたのは、サウジアラビアの Prince Sultan College for Tourism and Business (private college)、オマーンにある Sultan Qaboos University の College of Arts and Social Sciences, Department of Tourism の二つ大学である。

## 中東の大学の講義は英語が主流

サウジアラビアの Prince Sultan College では、約一〇〇名の学生が在籍しており、観光およびホテル学科の教育は主として英語で行われていた。教育内容は、旅行業やエアラインおよびホテルの人材育成という実務志向の教育が中心であった。教授陣は、外国から

招聘した人々で占められ、テキストは英語圏から出版されている観光学や経営学、ホスピタリティ関係のものが使われていた。教育期間は五年間で、一年目には主として英語やコンピュータ教育、二年目から専門の講義と実習が行われ、実習は主として大手旅行会社や五つ星ホテルを中心に行われているとのことだった。

同大学の教授陣からランチに招待されたとき、その席上、ある教授から「日本では講義は英語で行われているのか」との質問があった。私は「日本の多くの大学は、特別な学部を除き、講義は日本語で行われている」と答えると、残念そうな表情を見せながら、「英語で教育が行われているならば、学生や教員の交流をすぐにでも開始できるのだが」と言われた。彼らの関心は、日本的なホスピタリティや接客の仕方にあるようだった。

## 本学部との人的交流の要請を受ける

オマーンの Sultan Qaboos University に開設されている College of Arts and Social Sciences, Department of Tourism は、二〇〇一年に新設された四年制の学部であり、二〇〇五年現

在、観光学科には二二〇名ほどの学生が在学していた。講義は Prince Sultan College 同様に、科目数の九五%程度が英語で行われていた。教育内容は観光産業を志向した人材の育成と、次代の観光研究者の養成を目指した内容まで広範にわたっていた。

同大学人文社会科学部長の学部長および観光学科長からは、人文社会科学部と立教大学観光学部の間

での観光研究スタッフの相互受入協定と日本語講座を開講してほしいとの要請を受けた。これを契機に、中東諸国の大学と日本の大学との間で、学術研究や教育を通じた交流がさらに発展することを期待したい。幸い本学部には、二〇〇六年四月に交流文化学科が新設された。われわれとは異なる文化・言語そして制度を持った国々や地域とのさらなる交流の開始を期待する次第だ。



# スルタン・カブース大学代表団来日

2006.5.30～6.3

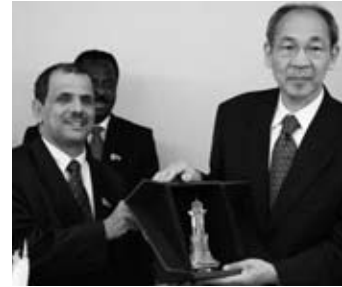


© 2006 Sultan Qaboos University



Sultan Qaboos University

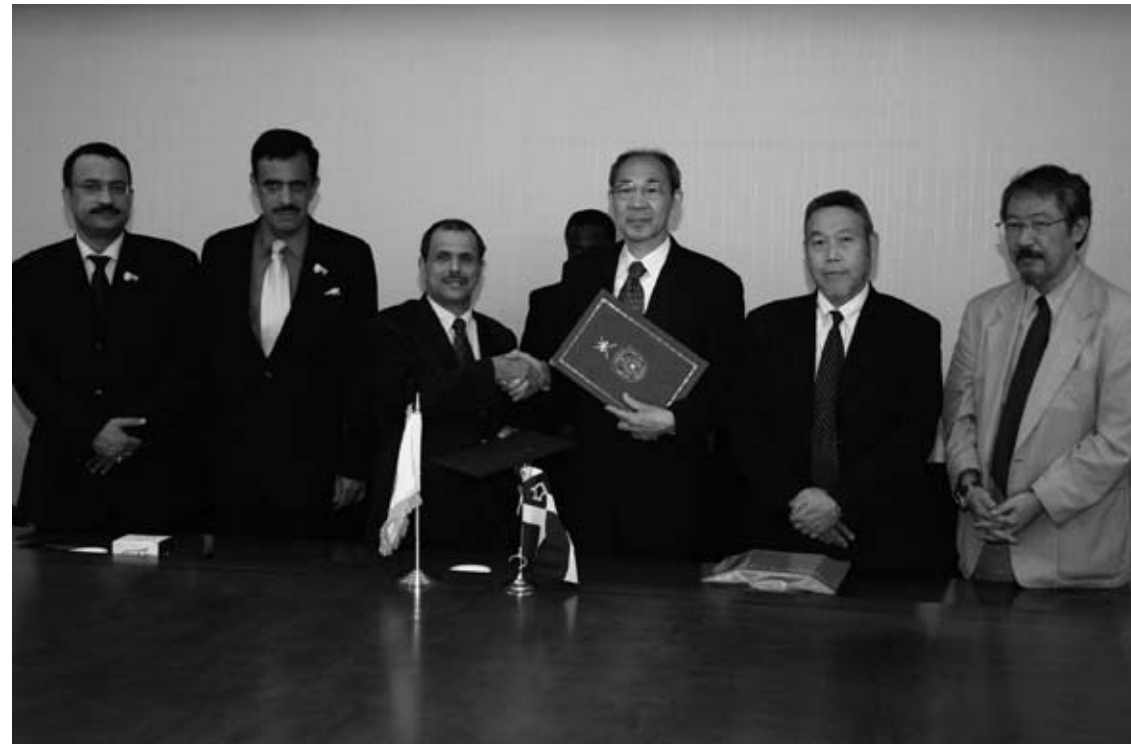
スルタン・カブース大学は、オマーン国王によって創設された同国唯一の国立総合大学。医学、工学、農学、教育学、理学の5学部からなる大学として発足した後、さらに人文社会科学部、商学・経済学部が設けられ、幅広い分野で学部および大学院教育が行なわれている。同国の首都マスカット郊外には広大なキャンパスが広がる。



立教大学総長とスルタン・カブース大学長

二〇〇六年五月三〇日から六月三日までオマーン唯一の総合大学であるスルタン・カブース大学より学長、人文社会科学部部長、観光学科長、国際センター部長、広報部長からなる代表団が来日した。五月三十一日には、立教大学にてスルタン・カブース大学人文社会科学部と立教大学観光学部との学部間協定の締結、調印が行われた。

調印式には駐日オマーン大使も臨席され、本協定に基づく両学部の研究教育交流への支持を表明された。六月一日には新座キャンパスを訪問。人文社会科学部部長による講演会が行われた。今回の学部間協定の締結により、今後オマーンをはじめ中東地域との観光研究教育交流の拡大が期待されている。





# 2006年度 立教大学観光研究所 公開講座

立教大学観光研究所では、以下の2つの  
観光産業の入門的公開講座を実施しています。  
学生はもちろん、社会人など広く受講者を受け入れています。

## ●旅行業講座

### 「国内旅行業務取扱管理者試験」 「総合旅行業務取扱管理者試験」 のための準備講座

(2006年4月開講7月修了)

「旅行業講座」は、毎年10月に全国で行われる国家試験「総合旅行業務取扱管理者試験」とそれに先立ち9月に行われる「国内旅行業務取扱管理者試験」のための準備講座です。旅行業界とその業務に関心を持つ人たちが受講しています。旅行業に必要な専門的、かつ実際の知識を一流の講師陣が、実務経験のない人にもわかりやすく講義します。講義内容では、旅行業法から海外・国内観光資源、旅行実務などの幅広い内容を扱います。

## ●ホスピタリティ・マネジメント講座

### 宿泊・外食産業の理論と経営、 最新動向を学ぶ

(2006年9月末開講12月修了)

ホテル・旅館業・外食産業を中心とするサービス産業は、今日「ホスピタリティ産業」と呼ばれています。「ホスピタリティ・マネジメント講座」では、ホスピタリティ産業の基本理念から、マネジメントの基礎理論、マーケティング、人事、営業企画、法律、最新の業界動向といった幅広い内容まで、業界の第一線の実務家を講師に招いて講義を行います。2006年度は会計の分野も充実した内容になっています。

## 問い合わせ

### 立教大学観光研究所事務局

(池袋キャンパスミツチエル館)

TEL 03-3985-2577 FAX 03-3985-0279

Email: kanken@tr.rikkyo.ac.jp

詳しい講義内容、受講申し込みについては

<http://www.rikkyo.ne.jp/grp/kanken/>



## 次号予告

2007年1月刊行予定

## 特集

# フィールドワーク

## 交流文化

04

2006年7月20日発行

発行人 稲垣勉  
編集人 大橋健一

デザイン 望月昭秀  
印刷 こだま印刷株式会社

## 問い合わせ先

### 立教大学観光学部

〒352-8558 埼玉県新座市北野1-2-26

TEL 048-471-7375

<http://www.rikkyo.ne.jp/grp/tourism/>

\*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

©2006 Rikkyo University, College of Tourism. Printed in Japan.

執筆者紹介 (50音順)

## 稲垣 勉

(いながき・つとむ) 観光学部長

1973年立教大学社会学部観光学科卒業、1976年同大学院社会学研究科修士課程修了。横浜商科大学助教授を経て1987年より本学勤務。1994～95年ヴァージニア工科大学客員教授、2000～01年ハワイ大学客員教授。著書に『観光産業の知識』、『ホテル産業のリエンジニアリング戦略-環境・コミュニティ・表現・スタイル・場所性-』、『Japanese Tourists(共編)』など。

## 小沢健市

(おざわ・けんいち) 観光学部教授

1972年東洋大学経済学部卒業、成城大学大学院経済学研究科修士課程、同博士課程・東洋大学大学院博士後期課程修了。東洋大学短期大学助教授・教授を経て1998年より本学勤務。経済学博士。主な著作に『観光の経済分析』、『観光学』、『観光の新たな潮流』(共著)、『観光を経済学する』、『観光の経済学』(訳書)、「景観を形成する要素としてのCommon Pool Resourceの経済分析」(単著)、『日本国際観光学会論文集』所収(第12号)など。

## 毛谷村英治

(けやむら・えいじ) 観光学部教授

1985年京都大学工学部建築学科卒業、京都大学大学院工学研究科修士課程修了、同博士後期課程指導認定退学。京都大学助手、宮城大学助教授を経て2006年4月より本学勤務。博士(工学)。1994～95年コーネル大学客員研究員、2002年ハワイ大学客員研究員。専門は建築企画・建築計画。主な著作に『まちに住まう大阪都市住宅史』(共著)、「A Study on Facility Planning at International Expositions」(単著)(第六回亜細亜太平洋建築国際シンポジウム)。

## 舩谷 鋭

(ますたに・さとし) 観光学部助教授

1964年東京生まれ。早稲田大学第二文学部卒業、東洋大学文学研究科修士課程修了。大正大学文学研究科博士課程中途退学。早稲田大学助手、本学嘱託講師を経て、1999年より現職。2005年度はマラヤ大学東アジア学科で教鞭を執る。東南アジア華人研究、特にマレーシア、シンガポールの華人文学を専攻。主要著作に『国民開発政策下のマレーシア』、『亜細亜通俗文化大全』、『日本占領下の英領マラヤ・シンガポール』、『東南アジア文学への招待』(以上共著)など。

## 松村公明

(まつむら・こうめい) 観光学部教授

1961年京都市生まれ。1986年慶應義塾大学文学部史学科卒業、1993年筑波大学大学院博士課程地球科学研究科単位取得満期退学、秋田大学教育文化学部助教授を経て、2006年4月より現職。専門は都市地理学・観光地理学。主要著書・論文に『EU統合下におけるフランスの地方中心城市-リヨン・リール・トゥールーズ』古今書院(分担)、「仙台市における宿泊機能の立地特性」(単著)など。